

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K03261

研究課題名（和文）東日本大震災の長期的影響としての子どもの攻撃性に対する介入プログラムの構築

研究課題名（英文）An Intervention Program for Aggression in Children as a Long-Term Effect of the Great East Japan Earthquake

研究代表者

足立 智昭（Adachi, Tomoaki）

宮城学院女子大学・教育学部・教授

研究者番号：30184188

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、臨床発達心理学のアプローチに、精神分析学の投影性同一化理論のアプローチを統合し、攻撃性の高い児童への新しい介入プログラムを構築することを目的とした。研究の主な成果は以下の通りである：（1）攻撃性の高い児童への介入モデルにおいては、教師の組織や、攻撃の対象となった教師のアセスメントも重要である、（2）攻撃性を示す児童への介入においては、EMADISモデルを念頭に置きながら、対象児の発達のアセスメントに基づく支援と児童との愛着水準のアセスメントを同時に行うことが必要である、（3）教師と児童との愛着の形成においては、メンタライジング理論が有効であることが示唆される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で対象とする子どもたちは、家庭機能が低下した葛藤家族の中でマルトリートメント、あるいは虐待を受けている子どもたちである。彼らの攻撃性は、ときには強い甘え、衝動性、集中の困難性を伴うことがあり、愛着障害、発達性トラウマ障害などの臨床群に類似している。これらの臨床群に対するアプローチは、児童精神医学、臨床心理学、児童福祉などの領域で行われているが、彼らの攻撃性に巻き込まれる大人たちをも扱った研究は少ない。また、現在、保育、教育現場においては、子どもの攻撃性に曝されて、心の健康を害する保育士、教師が増加している。本研究は、これらの問題解決にも寄与するものと期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to construct a new intervention program for children with high aggression by integrating the clinical developmental psychology approach with the projective identity theory approach of psychoanalysis. The main results of the study were as follows: (1) In intervention model for children with high aggression, the assessment of teacher group and the teacher who was the target of the aggression are also important; (2) In intervention with children who show aggression, it is necessary to assess the development of children and also to assess the attachment level of the children; (3) Mentalizing theory is available in the formation of attachment with the children.

研究分野：発達臨床心理学

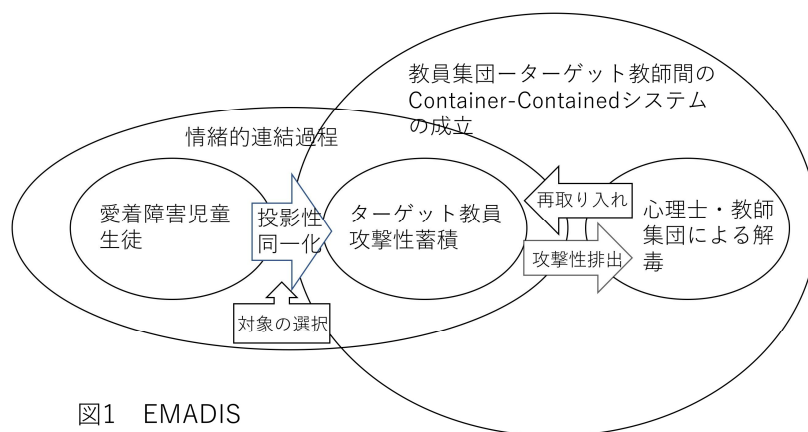
キーワード：東日本大震災 長期的影響 愛着トラウマ 攻撃性 幼児 児童 保育士 教師

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災が子どもたちに与える影響は長期化している。たとえば、文部科学省が公表した「児童生徒の問題行動調査」(2018年10月26日)によれば、宮城県における中学校の不登校率は3年続けて全国最多となった。震災の翌年以降、不登校率は上昇を続けており、宮城県教育委員会も「沿岸被害地に限らず、県内全域で震災が子どもたちに与えた心理的影響はまだ続いている」と分析している。また、子どもへの影響は幼児、児童にも及んでおり、研究代表者(足立)と研究分担者(平野、柴田)が実施した2017年度の保育所、児童クラブなどへのアウトリーチ活動(約150回)においては、子どもの暴言・暴力等の攻撃性への対応を問われることが多かった¹⁾。たとえば、2,3歳の幼児が、保育士に向かって「シネ」、「キエロ」、「クソババア」などの暴言を吐く事例もあり、これらの暴言を毎日浴びる保育士の傷つきは深く、現場に大きな混乱を生じさせていた。

このような子どもの発達段階にそぐわない暴力的な言動の背景には、被災地における家族機能の著しい低下が仮定される。なぜなら、研究代表者は、震災直後から保育所や児童クラブのスーパーバイズを行ってきたが、高い攻撃性を示す子どもの多くは、「震災前に、既に親が離婚しており、生活が一層苦しくなった」、「震災後、親が失業した」、「震災後、親がアルコール依存症になった」、「DVや虐待が疑われる」などの葛藤の多い家族のなかで生活しており、震災による2次的、3次的な問題の影響を受けていたからである²⁾。そのことを反映するように、現場から我々に求められるスーパーバイズの内容は、「愛着障害」、「発達性トラウマ障害」など、虐待によるトラウマを扱ったケースが多くなっている。

したがって、被災地における子どもの攻撃性への我々の発達臨床学的アプローチは、その問題行動の背景にある要因のアセスメントと、それに基づく子どもと家庭の個別の支援計画を保育士、指導員と共に立案し、実施することであった。



一方、本研究のもう一人の研究分担者である大橋は、特別支援学校(関東地方)の軽度知的障害児が、教師に向ける攻撃性の問題に直面していた³⁾。これらの子どもたちの多くは、上記の被災

地の子ども同様、愛着形成の問題を抱えており、その問題によって生じる攻撃性を担任などの特定の教師に向けていたのである。また、教師の一部は、この攻撃性に対応できず機能不全の状態を呈していた。そこで、大橋は、7年におよぶ特別支援学校のスーパーバイズの経験に基づき、図1に示すEMADIS(Educational Model for the Attachment Disorders in the Special-Needs School)を提案した。このモデルは、投影性同一化を理論的根拠とし、愛着形成に問題を有する軽度知的障害児は、虐待してきた親(内的対象)を、選ばれた教師に投影し、その選ばれた教師は、虐待した親と同じように振る舞わされてしまう(かわいくない、腹が立ってしょうがない、無視したい、など)と仮定する。あるいは、虐待されて傷ついた自分(自己の一部)を選ばれた教師に投影することで、教師を無力な気持ちにさせたり、いつもおびえた気持ちにさせたりして、

それを脅す、虐待する親の役割を愛着障害児が取ろうとすると仮定するのである。実際、大橋はこのモデルに基づき機能不全となっている教師に対して心理教育を行い、一定の成果を上げている⁴⁾。

以上のように、発達臨床心理学をベースとする研究代表者らは、高い攻撃性を有する子どもの家庭機能の改善とその攻撃的行動の減少をねらいとするアプローチを取ったのに対して、精神分析学をベースとする研究分担者の大橋は、高い攻撃性を有する子どもと、その攻撃性の受け手である教師との関係性の変化をねらいとするアプローチを取ったのである。したがって、これら2つのアプローチを統合できるならば、より包括的に子どもの攻撃性への対応と子どもの攻撃性に巻き込まれる大人たちへの支援に大きく貢献できると考えられる。

本研究は、被災地における幼児や児童の攻撃性に焦点を当てるが、現在、被災地に限らず小中学生の攻撃性が社会問題となっている。NHKの調査によれば(「クローズアップ現代+」2018年8月6日)、全国の小中学校での対教師暴力は近年急増している(過去20年で8倍)。したがって、本研究の成果は、現代を生きる子どもたちの攻撃性とは何か、またそれにどう対応するかという、学術的な問いに対する一つの解答を与えるものと期待される。

2. 研究の目的

本研究は、被災地において野火のように広がる子どもの攻撃性に対応するために、研究代表者ら(足立、平野、柴田)が行っている発達臨床心理学的アプローチと、研究分担者(大橋)が行っている精神分析的アプローチを統合する原理モデルに基づき、介入プログラムを構築することを目的とする。また、本研究の学術的独自性・創造性は以下の通りである。

東日本大震災から8年以上が経過し、発達生態学的に混沌とした状態にある被災地において、理論的、実証的に裏付けられた原理モデルにしたがって、子どもの攻撃性に対する介入プログラムを作成すること。

その際、従来、臨床の場において協働することが少なかった発達臨床心理学と精神分析学を専門とする研究者が一つのチームとして被災地の難題に臨むこと。

本研究で得られた子どもの攻撃性に対する介入プログラムは、全国の学校で生じている児童・生徒の対教師暴力の問題にも応用が期待されること。

3. 研究の方法

本研究は、3つのステップによって実施される。それぞれのステップで何をどのように明らかにするかは以下の通りである。

研究 「原理モデルの構築」複数事例研究(1年目)

1) 研究代表者と研究分担者は、各々の現場において研究許可の得られた事例をデータ化する。事例は、攻撃性の高い子どもとその対応に困難性を感じた保育士・指導員の事例である。それらの事例とEMADIS(図1)に基づき、仮説的モデルを作成する。

2) 仮説的モデルによって、問題の発生状況から問題の解消までのプロセスが描けるかどうか、すべての事例に対し検討し、モデルの修正加筆を行う。また、仮説的モデルとは異なるモデルを改めて構築する必要が認められた場合1)のデータを用いてKJ法またはM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)を用いてモデル仮説生成する。

3) 2)において構成された仮説的モデルの内容的・構成概念的妥当性を、研究代表者と研究分担者が専門とする発達臨床心理学理論、精神分析理論に基づき検討する。また、日本発達心理学会などのシンポジウムの場を利用して、広く専門家の意見を聴取し(2020年3月)原理モデル

を構築する。

研究 原理モデルによる介入プログラムの開発及び効果検証（2年目）

によって得られた原理モデルに基づき、子ども、家庭、保育士・指導員に対する介入プログラムを開発、実施し、その効果を検証（子どもについては攻撃性の変化、保育士・指導員についてはうつやストレスの状態の変化を査定）する。

研究 原理モデルによる介入プログラムの開発及び効果検証（3年目以降）

によって検証された介入プログラムを、宮城県内の小中学校などでも実施し、介入プログラムの応用性を検証する。

4. 研究成果

初年度の研究のねらいは、攻撃性の高い子どもとその対応に困難性を感じた保育士・指導員の事例をデータ化し、それらの事例と大橋(2017)の EMADIS モデルに基づき、介入のための仮説的モデルを作成することにあった。研究代表者と分担者は、保育所・学童保育の現場で、攻撃性が高い幼児・児童の事例をデータ化した。その結果、その殆どの事例が、DSM-V の脱抑制型対人交流障害の診断基準の一部に当てはまった。また、これらの事例の中に、保育士が精神疾患を発症し、休職に至ったケースがあった。このケースでは、クラスの中で、特定の保育士に対して幼児の執拗な攻撃があったことに、周囲の保育士が気づかず組織としての対応が遅れていた。また、このケースでは、保育士の生育歴に特記すべき事項があり、そのことが状態悪化の要因となっていたことが推察された。以上のことから、攻撃性の高い幼児・児童への介入モデルにおいては、幼児・児童とその家族のアセスメントだけでなく、保育士・指導員の組織や、攻撃の対象となった保育士・指導員のアセスメントも必須の要因として加える必要がある。

2年目の研究は、初年度の研究によって妥当性が確認された EMADIS モデル（大橋，2017）に基づき、子ども、家庭、保育士・指導員に対する介入プログラムを開発、実施し、その効果を検証することを目的とした。以下、EMADIS モデルに発達臨床心理学的アプローチを加えることで、幼児の攻撃性に変化が見られ、幼児と保育士間に安定した愛着形成がみられた事例の概略を紹介する。この介入事例では、まず対象児（5歳男児）の行動観察と発達アセスメントを行った。その結果、年度当初、対象児の保育士への愛着が不安定であった理由には、対象児の発達特性があること（運動発達：2～3歳、言語発達：1～2歳）、また愛着の対象となるべき保育士が、気になる子どもが多いクラスの中で不安定となっていたことが考えられた。そこで、対象児の落ち着いたなさやクラスでのトラブルの背景には、運動感覚と言語の未熟さがあると考え、それらの発達を促す遊びを提案した。その他、実行系の発達を促すため、自分のしたい遊びについてストップウォッチを使って何分行うかを、対象児およびクラスの幼児のそれぞれに決めさせることや（自己決定の経験）、感情の言語化を支援することを提案した。さらに具体的な保育の工夫としてクラスを2つに分け、保育室前方と後方で異なる遊びを促した。ストップウォッチの取り組みによって、クラス担任は、対象児も含め、クラスの子どもの切り替えが良くなったと感じるようになった。また、クラスを2つの空間に分けて遊びに集中させることによりクラス全体のトラブルが減少した。このようにクラス統制が向上することにより、保育士は対象児ばかりでなく、クラスの子どもの安全基地となっていく。したがって、保育士に攻撃性を示す幼児への介入においては、EMADIS モデルを念頭に置きながら、対象児の発達のアセスメントに基づく支援と保育士との愛着水準のアセスメントを同時に行うことが必要であると判断された。

3年目以降の研究は、2年目の研究によって検証された介入プログラムを小学校などにおいても実施し、介入プログラムの応用性を検証することを目的とした。しかし、2021年度以降もコ

コロナ禍にあり、学校現場での研究は困難であった。そこで、同じ児童が生活をしている放課後児童クラブは、学校現場よりも小規模であり、感染防止に努めながら研究を行うことが可能であったことから、放課後児童クラブのにおいて研究を進めることとした。しかし、学童期の子どもたちを対象とした場合、幼児期とは異なる「気になる行動」をアセスメントするツールが新たに必要となった。そのため、我々が1年目に作成した幼児を対象とする「気になる子どもの行動チェックリスト」(Behavioral Scale for Difficult Child after Disasters: BSDCD)をベースに新たなチェックリストを作成し、その妥当性の検証を行った。その結果、幼児を対象とした先行研究では衝動性、多動性、共感性、愛着不全性、生活リズム不安定性の5因子であった因子構造が、衝動性、生活リズム不安定性、愛着不全性の3因子となった。回答者に発達特性(気になる/気にならない)を尋ね、BSDCD 尺度得点とその下位尺度得点、性別、学年を説明変数とする二項ロジスティック回帰分析を行ったところ、BSDCD 尺度、衝動性尺度、愛着不全性尺度に有意なオッズ比が認められた。以上の結果は、東日本大震災後、中長期に現れた学童期の気になる子どもという印象について、特に攻撃的言動を含む衝動性と愛着不全性といった要因が強く関連していることが示された。したがって、これら児童の支援においては、保護者の協力が必要となるが、保護者が我が子の行動特徴を客観的に理解するために、このチェックリストの結果を積極的に活用することが重要であると判断された。

なお、2022年度後半より、新型コロナウイルス感染症がすこし落ち着いてきたことから、宮城県沿岸部の小学校、中学校における教員研修において、攻撃性、衝動性が高い子どもへの介入方法として、本研究によるアプローチを紹介することを続けた。これらの研修の事後アンケートから、発達障害児と愛着に課題を有する子どもとの異同を理解できたこと、また後者の子どもへの支援には、保護者への介入が重要であることなどの感想が多く見られた。一方で、教師が子どもとの愛着を形成するにはどうすれば良いかと質問が多く見られたことから、今後は、メンタライジング理論によるアプローチ⁵⁾を取り入れ、教育現場でより導入しやすい介入モデルについても検討を行う予定である。

文献

- 1) 柴田理瑛・平野幹雄・西浦和樹・足立智昭(2018) 保育・教育現場における子どもの攻撃性とその対応について. 宮城学院女子大学発達科学研究, 18, 77-80.
- 2) 足立智昭(2018) 震災を生きる:トラウマやPTSDとともに地域で生きるために(川島大輔他編『多様な人生のかたちを迫る発達心理学』)ナカニシヤ出版(印刷中)
- 3) 大橋良枝(2017) 知的特別支援学校の混乱に対する臨床介入モデルの精神分析的検討(1) 愛着障害児の投影性同一化と教師の孤立. 聖学院大学論叢, 30(1) 65-81.
- 4) 大橋良枝(2018) 愛着障害児に対応する知的特別支援教師の Negative Capability 支援の重要性と自我心理学的視点の有用性の検討. 聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER, 27,1
- 5) 西村馨編著(2022) 実践・子どもと親へのメンタライジング臨床. 岩崎学術出版社, 東京.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 柴田理瑛・足立智昭・平野幹雄	4. 巻 22
2. 論文標題 学童期における気になる子どもの実態	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋良枝	4. 巻 34
2. 論文標題 子どもたちへの東日本大震災の非直接的影響：保育所における子どもたちの発達アセスメントツール開発に向けて.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 聖学院大学論叢	6. 最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 足立智昭・大橋良枝・柴田理瑛・平野幹雄	4. 巻 21
2. 論文標題 東日本大震災の長期的影響としての子どもの攻撃性に対する介入プログラムの構築	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 足立智昭・平野幹雄・柴田理瑛	4. 巻 増刊号
2. 論文標題 保育・教育の場における子どもの支援	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 118-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 足立智昭	4. 巻 3
2. 論文標題 追跡調査に見る、東日本大震災がもたらした子どもの心の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教職研修	6. 最初と最後の頁 92-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Xiyue Wang, Kazuki Takashima, Tomoaki Adachi, Yoshifumi Kitamura:	4. 巻 540
2. 論文標題 Can Playing with Toy Blocks Reflect Behavior Problems in Children?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CHI	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1145/3411764.3445119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Xiyue Wang ・ Kazuki Takashima ・ Tomoaki Adachi ・ Yoshifumi Kitamura	4. 巻 Vol. 4(1)
2. 論文標題 AssessBlocks: Exploring Toy Block Play Features for Assessing Stress in Young Children after Natural Disasters.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ACM Interact. Mob. Wearable Ubiquitous Technol.	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1145/3381016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 足立智昭
2. 発表標題 東日本大震災後、急増する 攻撃性の高い子どもたちへの介入
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋良枝
2. 発表標題 子どもの攻撃性と、保育士への影響を力動的に理解する：投影性同一化を根拠に
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴田理瑛
2. 発表標題 気になる子どものアセスメントとアタッチメントの形成過程について
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平野幹雄
2. 発表標題 安全基地としての大人たちの役割
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 足立智昭
2. 発表標題 外傷的出来事を経験している子どもの攻撃性への対応(2)
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 足立智昭（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 148
3. 書名 多様な人生のかたちに迫る発達心理学	

1. 著者名 天童陸子・足立智昭（共編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 198
3. 書名 地域子ども学をつくる 災害、持続可能性、北欧の視点	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平野 幹雄 (Hirano Mikio) (20364432)	東北学院大学・教養学部・教授 (31302)	
研究分担者	柴田 理瑛 (Shibata Michiaki) (20589775)	東北福祉大学・総合福祉学部・講師 (31304)	
研究分担者	大橋 良枝 (Ohashi Yoshie) (50787702)	聖学院大学・心理福祉学部・教授 (32412)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------